

大阪民衆史研究会報

2025年7月号
第32巻第6号
(通巻357号)

発行 大阪民衆史研究会 (代表 林 耕二)

E-mail: osaka.minshushi@gmail.com (オーサカ ドット ミンシューシ)

例会のお知らせ

◇8月例会

日時 8月10日(日) 13時半開場、14時開会

会場 大阪府教育会館3F蘭の間

報告 山中康平さん コメンテーター 赤塚康雄さん(会員)

「大阪市の学童集団疎開史—受け入れ側・四国地方からの考察」

アジア・太平洋戦争中、大都市で暮らす子どもたちを対象に学童集団疎開が実施された。大阪市は子どもたちを集団疎開させたが、疎開先のひとつ四国(愛媛・香川・徳島)は、どのように疎開児童を受け入れたのか。学童集団疎開史は多くの場合、「疎開側」の立場で研究される。「受入側」からの研究は少なく、対象地域は東日本、近畿、中国地方ばかりである。四国は資料的制約から研究が皆無に等しい。しかし、本報告では報告者がつぶさに調べた地域資料と、埋もれていた史料を多分に用いる。空白地帯の四国を統一的・体系的に実態調査を行うことは大阪市の学童集団疎開史の全体像を明らかにする上で重要となる。

◇9月例会

日時 9月21日(日) 13時開場、14時開会

会場 大阪府教育会館3F蘭の間 報告 小林義孝さん(本会会員)

「考古学者・喜谷美宣、その学問のなりたち」

1950～60年代の考古学をめぐる状況の中戦後民主主義を信念とする喜谷氏の考古学がどのように形成されたかを考える。その時期生み出された遺跡の「記録保存体制」、破壊するものに費用を負担させ記録のみは残すという体制、喜谷氏もその体制が形成されるなか模索し苦慮された。報告者もその体制下、文化財行政にかかわり考古学を勉強してきたが、半世紀がすぎてその体制は機能不全を起こしつつあり、それを担う行政内研究者も遺跡の保護や保存との緊張感を失っている。現在は再度考古学と遺跡の保存を考える時期がきている。その作業の一環として戦後の考古学を作り上げ遺跡の保護に全力を尽くし苦悩した喜谷美宣さんの考古学を総括してみたいと考える。

参加費 会員 400円 非会員 500円